

**教育学部・教育学研究科**

I	研究の水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 著書・論文の発表件数は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の年度平均168件から第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の年度平均192件へ増加している。
- 科学研究費助成事業について、平成25年度から平成27年度の採択率は毎年度60%を超えており、採択件数は新規と継続を合わせて毎年度30件前後と、研究科の教授と准教授を合わせた数の90%に相当する件数となっている。また、平成24年度に新学術領域研究（計画研究）等の大型研究費が採択されたことで、平成24年度から平成27年度の採択金額は毎年度1億円を超えている。

以上の状況等及び教育学部・教育学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

### 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に認知科学、哲学・倫理学において卓越した研究成果がある。また、国際的なトップジャーナルへの論文掲載や国際学会 Society for the Advancement of American Philosophy で Joseph L. Blau Prize を受賞している。
- 卓越した研究業績として、認知科学の「ヒト特有の社会的認知機能の解明とその個体発生に関する研究」、哲学・倫理学の「アメリカ哲学の現代的意義をめぐる学際的・国際的対話研究：哲学と教育のクロスカレント新領域開拓」がある。「ヒト特有の社会的認知機能の解明とその個体発生に関する研究」は、研究成果が国際的なトップジャーナルに掲載されている。
- 特徴的な研究業績として、実験心理学の「言語における系列情報の処理と保持に関する実験心理学的研究」や「ワーキングメモリの機能とメカニズムに関する実験心理学的研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に認知科学、教育学において特徴的な研究成果

がある。また、第2期中期目標期間に研究成果がマスメディアで取り上げられた件数は合計143件となっている。

- 特徴的な研究業績として、認知科学の「ヒト特有の社会的認知機能の解明とその個体発生に関する研究」、教育学の「「逆向き設計」論に基づくパフォーマンス課題とカリキュラムの開発」がある。

以上の状況等及び教育学部・教育学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、教育学部・教育学研究科の専任教員数は40名、提出された研究業績数は8件となっている。

学術面では、提出された研究業績8件（延べ16件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は6割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績5件（延べ10件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は6割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 科学研究費助成事業について、1件の新学術領域研究、2件の基盤研究（A）等の大型研究費が採択されており、平成24年度から平成27年度の採択金額は毎年度1億円を超えている。また、平成25年度から平成27年度の採択率は毎年度60%を超え、採択件数は新規と継続合わせて毎年度30件前後となっており、研究科の教授と准教授を合わせた数の90%に相当する件数となっている。
- 発表した著書及び論文のうち査読有りの割合は、第1期中期目標期間の平均23%から第2期中期目標期間の平均34.6%へ増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 認知科学の「ヒト特有の社会的認知機能の解明とその個体発生に関する研究」や哲学・倫理学の「アメリカ哲学の現代的意義をめぐる学際的・国際的対話研究：哲学と教育のクロスカレント新領域開拓」等の優れた研究業績があり、研究成果が国際的なトップジャーナルへ掲載されているほか、国際学会で賞を受賞している。また、第2期中期目標期間に研究成果がマスメディアで取り上げられた件数は合計143件となっている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

### 2. 注目すべき質の向上

- 科学研究費助成事業について、1件の新学術領域研究、2件の基盤研究（A）等の大型研究費が採択されており、平成24年度から平成27年度の採択金額は毎年度1億円を超えている。また、平成25年度から平成27年度の採択率は毎年度60%を超え、採択件数は新規と継続合わせて毎年度30件前後となっており、研究科の教授と准教授を合わせた数の90%に相当する件数となっている。
- 発表した著書及び論文のうち査読有りの割合は、第1期中期目標期間の平均23%から第2期中期目標期間の平均34.6%へ増加している。